不便を楽しむ

ベランダ菜園、おうちキャンプも

辞書を手に取り「不便」とひいてみる。「その場にあればよいと思うものが容易には得られず、快適さに欠けると感じられること」。マスクがない。友人、親族に会えない。旅行にも行けない……。欠けてばかりの日々だからこそ、不便の中に価値や効用を見いだしていきたい。不便に価値？　そんなのあるの？　あります。やってみます。

「人間、額に汗して、油にまみれて、地道に暮らさなきゃいけねえ。そこに早く気がつかなきゃいけねえんだ」。寅さんが、『男はつらいよ　望郷篇』で自省を込めて説いていた。他者と距離を取り、長い時間を室内で過ごして食べては寝る。そんな暮らしを強いられていても、寅さんのいう「人間」らしさを取り戻せないだろうか。

『ごめんなさい、もしあなたがちょっとでも行き詰まりを感じているなら、不便をとり入れてみてはどうですか？』という長いけれど、だからこそ心に引っかかるタイトルの本を書いた工学博士の川上浩司さん（55）に相談することにした。京大と京都先端科学大の先生で、「不便益」、つまり不便だからこそ得られる効用を研究する。

「外から不便を押しつけられている状況は、つらいですよね。でも、主体性を持てば不便も楽しめます」。川上さん設立の「不便益システム研究所」は、不便がもたらす八つの「益」を掲げる。私も採り入れることにした。

記事の冒頭、「不便」の意味を辞書でひくのも不便益の一つだ。パソコンや電子辞書よりも時間がかかる分、別の言葉も目に入る。「発見」の喜びがある。さっそく未知の単語に出会った。不磨。「長い年月を経ても、その価値が全く損なわれないこと」とあるのを見て、眼前のパソコンを思う。使用開始から5年、すっかり動きは鈍くなり、イライラの元凶になっている。

自粛生活で進む「便利」への依存

「技術が進歩し、自動化が進むとブラックボックス化し、自分では工夫も修理もできなくなる」と川上さんは指摘する。家にいながら会議や飲み会がオンラインでできたり、生活に必要なあらゆる品をネットや宅配サービスで注文できたり。不便を強いられる暮らしは、便利さへの依存を強める暮らしでもある。そこでもし、ネットがつながらなくなったら、電気が途絶えたら……。既存のシステムに乗るのはたやすく効率的だが、失われたときに多くの人はなすすべがない。

自らを省みると、人は食べなくては生きられない動物なのに、他人に任せきり。そこで、ベランダでバジルとパクチーを育てることにした。ほんの一端でも食料生産に主体的に携わっているという心の充足がある。いつ芽がでるか、毎朝の観察が楽しみになった。

自由に国境を越えられない今、心だけでもまだ見ぬ世界へ飛び出したい。渡航歴も知識もないという理由で、アフリカ・エチオピアの郷土料理「ドロワット」に初挑戦。ドロは鶏肉、ワットはシチューということらしい。2時間かけ、部屋中にスパイスの香りを充満させてできたカレーのような料理は、おいしいともまずいとも言い切れず、いままで食べたことのない苦いような酸っぱいような味に仕上がった。

川上さんが「正解がわからないのがいい。情報が足りないという不完全さが想像力をかき立て、印象を強めます」と言うのは本当だった。アフリカ最古の独立国はどんな国で、本場ではどんな味で、どのような人がどこで食べているのか、好奇心がかき立てられる。自ら手を動かして味覚まで刺激したからだろうか。いつか必ず訪ねてみよう。未来の楽しみも膨らんだ。

部屋にテントも張ってみた。お酒とソーラー照明を持ち込み、部屋の照明を消す。テント越し、見慣れたはずの景色が違って見える。ただ、益ばかりではなかった。テントの生地の分だけ蒸し暑いのだ。早々に抜け出し、ほのかな明かりでお酒は楽しんだ。

手間暇をかけて喜びかみしめる

移動も人力に変えてみた。よく晴れた日、そうだ寅さんに会いに行こう。東京・葛飾柴又へは家から約20キロ。地図を見ながら2時間半走り、着いた。柴又駅前で寅次郎像と初めて会ったときは心底うれしかった。「全身汗まみれじゃねえか。よくやったな」。そう声をかけてくれている、ように感じた。「どこでもドア」で来たら、褒めてはもらえなかったはずだ。

種をまいてから8日、ベランダのプランターからバジルが芽吹いた。

生きることは手間暇のかかること。プロセスをすっ飛ばさない地道な暮らしの中に、かみしめるような喜びや楽しみがあった。

（斎藤健一郎）

be report

便利を究極まで突きつめると

不便益8種

不便益システム研究所提供

記者がトライ！ 不便を楽しんでみた

グラフィック・古家　亘

◆次回の「be report」は「日本人のコロナ死者なぜ少ない」。毎月第1週は「北欧女子オーサの日本探検」です。